
見て――

マジコーバナナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

(前書き)

みてけ

0

真実を知るために、そこに有るもの、存在するものを見極めるんじや、はつきり言って意味がない。それは凡人の考えだ。まさに君のことだよ、綾川くん。探偵はいつだってね、そこに無いものの先にある真実を見つげるんだ。ふっ、以後、君の教訓にしてくれてもかまわないよ。

え？僕はどうなんだって？

そうだな……、僕は有るものも見ないし、無いものも見ない、見る必要が無い。

どういうことだって？君には到底、分らないんじゃないかな……。

天才としての考えだからね。

？「型無し」

1

5月の初めのことだった。

もうすぐ18年目の誕生日を迎える俺は、知り合いに紹介された仕事をしに山奥へ車で向かっていた。紹介された、というか押し付けられたのだが、ある人物の家庭教師をしてくれというものだ。すなわち、アルバイト。それは俺にとっては人生最初のアルバイトで、そして生涯で最悪のアルバイトになろうとしていた。

もちろん、俺はまだそのことには気づいていない。この時点で、あんなことが起こる、あんなものに出逢ってしまうことに気づける者などいないだろう。気付いていて、知っていて、あの地獄に飛び込

む奴なんざこの世にいない、俺はそう思ってる。そんなやつは人間じゃない。だって、

自殺志願者でも、あんなところに飛び込もうとはしないだろう。自殺志願者だって、あんな場所じゃなく、もっとぬるい壊れ方を選ぶだろう。自分で死に場所を選ぶだろう。

狂人だって、あんなに規則正しい地獄には一分一秒でもいられないだろう。自分の望まない規則で、狂って狂って、さらに狂わされてしまうだろう。

そんな奴らが来る場所じゃない。

やって来たとしたならば、

それは、

ただの殺人鬼の神経を持った、鬼か、

それとも、

2

俺が車に乗ってから時間が、もう三時間を過ぎようとしているが、車内は静かでエンジンの音だけが耳にはいつてくる。俺は三時間もの間、何もすることが無かったので、色んな事を考えながら、山の景色を見ていた。

…それにしても、木しかないな。

俺の見た限りでは車の走っている道以外ほぼ木で埋め尽くされていた。それですぐ木を見るのを飽きてしまった俺だが、一周回って何か、木を見るのが楽しくなり、今までなんとか見ていた。それでもまた飽きてしまったので俺は運転手さんに声を掛けようとした。俺は静かなのは好きだが、さすがにもう退屈で仕方が無いのだ。だが、俺が話しかけようとした瞬間、運転手さんが初めて自ら口を開いた。

「……ここから先は、歩いていただけませんかね？」

「え？どうしてですか？」

俺の求めていたのは社交的な他愛無い会話だったが、ひどいことを言われた。

……歩くの？冗談だよな？

「ここから先、車、通れないんですよ……」

運転手さんの口ぶりでは、道の状態がどうこうではなく、ここからは車は通ってはいけないことになっているらしい。

……俺をいじめたいんじゃないのか、良かった。

俺がそんなことを思っていると、運転手さんは、その大きな手で道の方を指さして、

「この道を真っすぐ行けば問題無く到着できますので」と、言った。

俺は運転手さんの指す方向を見たが、何も目的地らしきものは見当たらないので、おそらくけっこう歩かなくてはならないだろう。文句を言うわけにもいかないなので、俺は仕方なく、ドアを開けてお礼を言った。

「どうも、ありがとうございます」

「いえいえ……お疲れ様です。では」

気を付けて。運転手さんはそう言って、車をバックさせていった。俺は車が見えないようになってから、歩きだした。

ハア……、とため息をつきながら。

歩くのは嫌いじゃない、むしろ好きだ。

苦痛なのは、寧ろこれからのことだった。

アルバイト、家庭教師。

家庭教師と言っても相手は中学2年生のまだまだ子供だし、俺が中2の勉強を教えてあげられないというワケではない。人と話すのが苦手な俺だが（家庭教師をするのに人と話すのが苦手だと言うのは致命的だが）、ま、そこはなんとかなる。

そこまでは問題ない。

そこは問題じゃない、問題の中に入らない。
これからのことを考えれば、
何で、

「何で、こんな豪邸で……」

この、町から車で三時間はする、町からほぼ隔離されていると言
つていい、この山の奥で、俺の目の前にそびえたつ門。俺の身長
は170前後だが、俺の3倍かそこらはあるそうだった。門を見上
げると一緒に太陽が見えて、思わず目を細めてしまう。

「竜宮……ね……」

日本、いや世界でもトップクラスと言われてもおかしくない企業
といわれている、竜宮財閥。財閥の中の財閥。傘下には何万もの企
業があると言うのだから驚きである。

そして、竜宮財閥の一番の権力者、竜宮豪の妹の竜宮亜衣沙が娘、
竜宮亜麻の家庭教師を頼まれたというワケだ。

「どうして俺なんか……」

本当に唐突だった。

俺は別に、生まれてから約18年間、国民に認められるほどの革
新的な何かを成し遂げたわけでも、素晴らしく高潔な人生を送って
きたワケでもないのに……。

本当に不可解だ。

この場合、理不尽と言ってもいいぐらいだ。

というか俺が頼まれたんじゃないのに、本当に行ってもいいのだ
ろうか……。

知り合いには、人を変えるからいいかと聞いて、了解されたらし
いが……。

心配だ。苦笑いされて、追い返されたらどうしよう。

それはそれで、もう、別にいいや……。

でも、と俺は思う。

「でも、門は意外と汚いんだな……」

汚い、とは泥にまみれて、醜いみたいな汚さじゃなく、まるで、

あえてその汚さを維持しているような、洗練された汚さ。
何故、そんなことを。

見栄え的に、わざと古めかしくするのは分かるが、でもこれは少し違う、と俺は思った。

これではまるで……、

「…おっと、危ない」

勝手に、分析して思い込むのは俺の悪い癖だ…、やめないと。

そんなことより、と俺は考える。

とにかく、まずは中に入って挨拶をしよう。

そのときにでも俺を採用した理由を聞けばいいか。

僕はそう思っただけ少し低いところにあるチャイムを指でグッと押す。

ピーッ

と、何かの電子音がして約十秒後、声が出た。

『藤堂 直人様ですね。お待ちしておりました……』

使用人が何かだろうか、女性の如何にも仕事だからという冷たい声が出して、

そして、

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオウウウ……

思わず耳を塞ぎたくなる、巨大な鉄が擦れ合って、ぶつかり合うような、そんな壮大な轟音が響いた。

「なんて音だ。金持ちならもっと静かになるようにできないのかよ。」

……

などと、嫌味なことを言ってしまったが、それ程大きな音だった。

冗談抜きで、普通に鼓膜が破れるかと思ったくらいだ。

そして、

『……どつぞ。』

ここですみました、と思ってももう遅い。

聞こえてしまったっていただろうか…？

どうしよう…俺の印象が最悪から始まるのか…？

そうやって俺がさながら問題の答えが分からない子供のようにな、

俯きながら頭を掻いていると。

『……?どござ。』

んー…、この声から察するに聞こえていなかったのだろうか。

…うん、まあ、大丈夫だろう。

まあ、別段そこまで気にすることでもないか。

『早く入ってくれませんか? 門を閉めたいので。』

……うーん。怒られてしまったようだ。

これでは、最初の言葉が聞こえていても、聞こえていなかったとしても悪い印象だろう。

「すみません…。お邪魔します…。」

そう言っただけは門の中に入って、玄関を…、あれ? 玄関はどこにあるんだ?

俺は見渡して遠くの方を覗いてみたが、俺の目に見えるのは凛々と生い茂る木、木、木、だった。

「あの、これって玄関はどこにあるんですか?」

俺は振り向き、聞いたがスピーカーからは返事は無かった。

それどころか、

キーッ

ガシャンッ!

「え……?」

俺は今、門を閉められ、竜宮家の敷地内に一人。

そして、見渡す限りの木々に竜宮の家は見つかる気配は無い。

そして道らしき道はあるが、いくつにも分岐し、そしてその先にも何も見えなかった。

あまりにも、遠すぎて。

マズい、マズいぞ……。

ここ、広すぎだろっ!

結局俺は多分まっすぐに行けば家はあるだろうと、そう思って5

00mくらい歩いたところで、遠くから、黒い車が走ってきた。黒く光るそれは、昆虫のような、獰猛な動物のような印象を抱いた。むむう…、こんな車に一度は乗ってみたいものだ。

その夢は1分も経たずに叶うことになる。

その中から出てくる女性。

すらっとした足、神々しいまでの純白のドレス、整った顔立ち。

その人は言った。

「10キロもの道を歩くのはつらいでしょう？どうぞ、車に乗って

」

いまさらつと10キロっていったよな…。どんだけ広いんだ…。

ていうか、この人は…、服装的に使用人ではないようだが。

いかにも金持ちって感じのドレスで、この人は、まさか。

「あの、あなたは？」

「私は竜宮亜衣沙。ようこそ私の庭へ。」

この人があの竜宮豪の妹、竜宮亜衣沙。

流星生粋のお嬢様と言ったところか、雰囲気が違う。

顔立ちも整っていて、一人の母親とは思えないほど綺麗だった。

でも、何故そのお嬢様が俺なんかをわざわざ、お迎えに…？

とにかく、何も言わず黙っているのはおかしいよな…。

「…庭、ですか。すごいですね。」

ここがすべて庭だと言っているんだろうか、まあ、そうだろうけど。

俺の反応に竜宮亜衣沙は顔をしかめ、唇をつきだして言った。

「えー。10キロってゆーの嘘なんだけど、つつこんでよー。」

嘘だったのかよ。

ていうか、初対面でしかも竜宮豪の妹に初めて話す言葉が突っ込みっぺおかしいだろ。

どんだけフレンドリーだよ。

まあ、楽しそうな人だと思った。

子供っぽいとも言えるけれど。

それは少し、救われた。

俺は一度そこで深呼吸をして、いや、亜衣沙さんには分からないように軽く息をはいて、言った。

「えっと、じゃあ実際の距離はどれくらいなんですか？」

「んー、私よくわかんないけど4、5キロくらいじゃないの？そこまで広いわけじゃないしね。」

どうにも金持ちっていうものは感覚が鈍ってるよな…。

まあ、仕方ないんだろうけどさ。

そんな思考は意味が無い、それこそ俺の止めるべき勝手に深入りする思考と同じくらい。

と、俺は思う。

そして、

では、車の中へ、と亜衣沙さん。

それに対して俺は、

「いや、いいです。自分の足で歩きます。風景も見ていきたいですしね。すみません。」

俺は、何気なく、言った。

迷うのは嫌いだ、歩くのは嫌いじゃない。

何気なく言ったが、気に障ってはいないだろうか。

いや、わざわざ来たのに怒るに決まっている。

俺は今更しまった、と思ったが、

しかし、それに対して、亜衣沙さんはうつすら目を閉じ両手を合わせて、指をゆっくり擦りながら、言った。

「……いいのよ。気が済むまで見ていつて頂戴？」

そして、亜衣沙さんは、子供みたいに笑った。

もう話は始まってしまったが今からでも遅くは無いと思うので、僕が体験したこの事件について知ってほしいことがあるので、話そう。知ってほしいということというのは、この話はBAD END、だということだ。

いや、終わってなんかいない。今もまだ続いているんだ。僕が彼女に謝罪し続ける物語は。謝罪し続ける物語とは…、おかしくて笑ってしまいそうだが、まあ、実際そうなのだから仕方がない。

…で、話を戻すが。

この物語に気の利いたハッピーは存在しない。

笑顔なんてものも何処にも無い。

あるとするならば恐怖に歪んだ笑顔。

または狂気の手顔だろう。

実際、僕はこのことはもう、思い出したくは無いのだ。

あんな狂った人間達のことなんて。

だが忘れてはいけない。

あそこまで狂って、終わってしまった彼女のことを。

忘れられるわけがない。

言っておくが僕は悲劇のヒーローを演じて、語りたかったわけじゃない。

というか、この物語において僕はヒーローじゃない。

ヒーローなんかじゃない。

決して。

確かに中心にいたように見えたのは、僕だったのかもしれない。

実際、あの頃は僕も僕で中心にいると自分でも少しは思っていた。

でも、違った。

勘違いも甚だしい。

僕は一人で、勝手にあの人の手のひらで踊っていただけなのだ。

踊っていたんじゃない、たださ迷っていただけなのだが。

僕がいなくても、世界は回るし、何の影響も無い、そして、あの事件も僕がいなくても回った、でも、僕がいたから、少女は死んだ。

僕のせいで。

言い過ぎだとは思わない。

もう、すでにだが、言っておこう。

彼女と僕のその後は、

いや、本当はその後なんて無いのだけれど、

無くなってしまったから、

すべて。

それでも、話そう。

僕は朝起きて、彼女の顔を見るたび心の中で謝り続ける。

僕は「おはよう」の代わりに謝って、「いってきます」の代わりに謝って、「ただいま」の代わりに謝って、「おやすみ」の代わりに頭を撫でてやる。

心の中で。

何度も謝ると彼女に怒られてしまうから。

それでも、多分もう許されることは無いのだ。

撫でる理由は、単に僕が撫でたいというワケじゃなくて。

女の子は撫でられると嬉しいらしい…。

本当だぞ。

だけれども、

彼女はもう僕に笑い返してくれることもないし、僕に話しかけることも無くなった。

当然だろう。

だって彼女はあの日、死んでしまったのだから。

いや、殺されたのだ。

多分、僕に。

最後にもう一つ。

この話はBAD ENDであるが、

DEAD ENDじゃない。

3 「無情無表情」

そついうワケで俺は一人、竜宮家への道を一人、歩いてきた。亜衣沙さんが向こうから来たのだから俺の選んだ道は間違ってたなかつたらしい。

と、ふと俺は思う。

本当に俺は今、竜宮家の敷地にいるんだよな…。

実際俺はまだ、その事実を実感したわけではない。

本当にまだ、信じられない。

嗚呼、本当に素晴らしいことだ。

そこで俺は気付く。

大きな木の後ろで（この敷地にあるのがほとんど大きな木のだが）、隠れているつもりなのか顔を出したり隠したりしながら、俺の進みたい道の方を見ている人影があった。

そいつは俺には気づかずに出たり隠れたりを繰り返している。

何故か焦っているようにも見えた。

俺がそつ見えただけで実際は焦ってなんかいなかったのかもかもしれない。

「なんだ……？」

俺は不審に思っつて、そいつに声をかけるかかけまいか迷い、結局、「君、どうかしたの？」

俺がこのような言い方になったのは、そいつが俺より25cmくらいか、だいぶ背が低かったからである。

要するに子供だと思つた。

「どうしたの？ かくれんぼでもしてるのか？」

そいつはギョツと、というワケじゃないが、少しだけ驚いたように振り返り、俺を見た。

予想通り、彼女は子供だつた。それも中学生くらいの女の子。まあ、中学生はかくれんぼなど、もうしないだろうが。

だが、僕は絶句して、眼を見開く。
彼女から見れば俺の顔の変化も明白だったろう。
彼女は綺麗なつややかな黒い髪をしていて・・・、僕は思った。
幼いとは感じさせながらも整った綺麗な顔立ち。
肩辺りで綺麗に切りそろえられている髪。
美しい。

可愛いじゃなく。
こんな子供に見蕩れるなんて、屈辱だと思つのを忘れるほどに、
とても美しかった。

そして、彼女はすぐ消えてしまうような泡のような小さい声で、
「……………れ」

……………え？なんて言つたんだ？
俺はこの子が言つた言葉よりも、その、透き通るような綺麗な黒
い、漆黒の眼に目を奪われていた。

その眼は俺のことをじつ…、と見ていた。
人の視線が何より苦手な俺だが、不思議と嫌ではなかった。

ここで俺は気付く、気付くというか、ハツと思った。

彼女は俺の返答を待っている。

いや、でも今、何と言つたんだ。

俺が困つた風になっていると俺が聞こえなかったことが伝わっ
たのか、彼女は少し声のボリュームをあげて言った。

「あなた、だれ？」

それはそうだった。俺もこの子のことは勿論知らないし、分かる
わけもないのだ。

いや、分からないというのはウソだ。

俺は本当にこの子の顔は見たことは無いが誰だかは、なるほどす
ぐ分かった。

竜宮亜麻だ。

おそらく、間違いない。

俺は竜宮亜麻に姉妹がいることは聞いていない。そしてもしかし

たら、竜宮亜麻の友達が来ているということも考えられるが、こんな山奥まで中学生が来るのは簡単ではないだろう。高校三年でもツライというのに。

それに今日は家庭教師…、すなわち俺が来ることは知っているはずだ、というより向こうから日にちと日時を指示してきたのだからそんな日に友達を呼ぶことはあまりしないだろう。

だから、間違いない。

およそまったく推理と呼べない、普通の思考なのだけれど。

そう確信すると俺は、車の中でさんざん考えた自己紹介の中から、「君は、竜宮亜麻さんかな？俺は今日から君の家庭教師をすることになった藤堂直人っていうんだ。よろしくね」と、言った。

我ながらなかなか良い、自己紹介だ。

だが、彼女は何も俺に言わず。ただ黙っているだけだった。無表情で。

さっきの俺の自己紹介がバカらしく思えるくらい。

俺は彼女には感情が無いんじゃないかと思った。なんでそんな顔ができる。

彼女は少しだけ俯いてから、今日家庭教師がくることを思い出していたのか、顔を上げて、言った。

「……そう」

それだけだった。

いや、本当は言っていないのかもしれない。口がそう動いたように見えただけで実際は声なんか出していないかもしれない。

あまりにも味気のない返答、彼女は俺に興味が無いらしい。しかしそんなことはどうでもいい。そんなことでは俺は傷つかない。傷ついたとしても、8時間もあれば立ち直られるぜ。所詮君が俺に与える苦痛なんてそんなものなんだぜ、と言ってやりたかった。

大ダメージだった。

ま、でも彼女が竜宮亜麻だという俺の推測は合っていたのだろう。

そういえば、と思って俺は、手を膝に置いて支え、少し屈みながら言った。

「…どうして、こんなところにいるの？」

こんなところって、自分の庭にいるのだからいいだろうという気がするが、お分かりいただけるように、ここは庭というか…、何かしらのテーマパークでも作れそうな面積なので普通の庭とは比較にならない。規模が違うのだ。自分の屋敷の庭だからと言って、迷わない、と言うワケにもいかないのではないかと思い、自然とそう言う言い方になってしまった。

俺の彼女に対する口調も少し問題はありそうだが…。

これぐらいの年頃だと対等に話してあげるほうがいいのかな？

「……」

やはり彼女は、俺がこんなにどうすれば普通に話せるかと考えているのにまた、無表情で俺の顔をジツ、と見ているだけだった。

まったく無愛想な子だ、と。

俺はそう思うだけだった。

「……」

沈黙が続く。

何秒経ったか分からないが、やはりそれは、何十秒にも、何分にも長く感じた。

そしてその沈黙を破ったのは、

彼女。

最初、俺の腕に何か、冷たい感触があった。

その冷たい何かに引っ張られたと思った、その刹那

俺の手に何か、生温かいものが這っていた。

じゅく…。

「……？」

蛞蝓と酷似しているそれ。

血液を連想させるそれ。

それを。

それを俺が、彼女の舌だと気付くのに多くの時間を要した。

「~~~~~！」
俺が慌てて後ろに飛び退くと、彼女の手と、舌から俺の腕が離れていった。

そしてまた、彼女は俺のことをジツと見つめる。先ほどと同じ、赤面などまったくいいほどしていない、無表情だった。

俺は彼女の顔を見てやっと頭を回転させられた。

冷静にさせられて、

「……は、ハア……？」

今、こいつ俺の手を舐めた……？

俺は手の感触を確かめる。微かに濡れている。

確かに、舐めた。

最初に感じた冷たい感触は彼女の手の冷たさだったのだろう。

そして次に、か。

思えば、女の子からこうやって触れられたのは人生初めてではないだろうか……。

初体験である。

あまり嬉しくは無いが……。まったくは言えないけど。

それどころか俺は、

中学生の女子に手を舐められたのだ。

それこそ人生で初めてで。

こちらはまったくと言っていいほど嬉しくない。

むしろキレたい。

誰が、この世に年上で初対面の家庭教師の手を舐める中学生がいるのだと想像できるだろうか。……少なくとも俺はできない。

だが彼女は、舐めるだけでは飽き足らず、というか、

それどころか。

彼女は、

彼女は何も言わず、俺に背を向けて俺の行きたい道へ真っすぐ走って行ってしまった。

逃走。

舐め逃げかよ！

「……！ちよっと、待って！」

俺は大声で叫び、彼女を呼び止めたが彼女はピクリ、ともせずに向こうへ走り去って行ってしまった。

走れば確実に追いついたはずなのに何故か俺はそれをしなかった。

何故か、か。

笑っちゃうぜ。

僕が。

僕がこのとき強引にでも呼びとめて良識的な大人のように、彼女を叱っていれば、あんな事件なんてなかったのかもしれない。切実にそう思う。

引き留めていれば。

だが、しかし、

そのときの俺には彼女が走り去っていったことなんて、どうでもよかった。

さすがに舐められたことはどうでもよくはないけど。

だがそんなこと俺にとっては問題ではなかった。

何故なら。

何故なら、今日俺がここに来たのは、

ここに来た理由は、

投げ出しに来たからだ。

仕事を。

4

最初はすっぱかそうかとも思った。

だがやはり、俺の性格上それは咎められて結局俺は屋敷に、正確

には亜衣沙さん曰く、「庭」まで、来た。
来てしまった。

だがそれは、素直に家庭教師をするというワケではなく。
勿論、丁重にお断りするために。
そうだ、そしてはつきりと、やりません、と言って堂々と帰らせ
てもらおうじゃないか。

オーケイ、完璧だ。

まあ、俺にとって常識など知ったことではないが、さすがに竜宮
財閥の頼みを見無視するワケにもいかないだろう。

だからせめて、直接断りに行こう、と、そういうわけである。
そこまで非常識ではない。

そして俺がこれから仕事を断りに行く理由だが、それは簡単、息
苦しいからだ。

息苦しい。

呼吸をするのが苦しい。

圧迫感。

その根源は、俺にとっては明らか。

竜宮亜衣沙。

竜宮財閥の権力者竜宮豪の妹について、俺に仕事を頼んできた、
あいつの話によれば……。

傍若無人な振る舞い、自由奔放で好き勝手、好き放題、したい放
題……。

…類語だっつの。

とにかく、それが…、嫌なのだ。

そんな人間にマシな奴はいない。…それを聞いて、普通、好意を
抱く人間がいるとも思わないが…。

まあ、普通以上に、俺はそんな人間は苦手である。

嫌い…、だ。

好きの反対は無関心だとよく言うが、それはどうだろう。

俺はそんなこと絶対に思わない、少なくとも現時点では…、いや、

嘘だ。絶対では無い。さつきまで、自分に対して、完全無関心の視線を投げかけられていたのだから。俺はその瞬間に、嫌われてるな、と、切実に思ったのだから。

いや、無関心ではないのか？その、何か、舐められたし…。

俺はそれを思い出して少し顔が熱くなって、思わずこめかみの辺りをポリポリ搔いた。誰もいないのにその行動はどこか空しいものがある…。

「何やってんだ、俺…」
「だけでも、」

俺の竜宮亜衣沙に対しての心境は、関心が無いというのでもまあ、説明でき無いことは無いのだけれど、ニュアンス的には…、と言うのか、関心が無いというよりは、嫌いと言ったほうがしっくりくるのだった。

嫌悪。

まあ、だけれども、もちろん、悪い噂だけでは無く、良いものもあつた。

例えば、

『普通の間ではできないことをやってのける』
というものだ。

これは、言ってしまうえば人間じゃないと言っているようなモノなので、俺は別に良い噂だとは思わないが…。まあ、あいついわくだ。俺が具体的に何をやったんだ、やれるんだ、と聞いてみたところ、あいつはこう言った。

「そうだね。聞いた話では本当はそんなことは無いらしいけど。いや、あるんだね。無ければそんな噂は流れないだろうさ。」

「例えば…、あくまで僕の推測だけど、超能力とか、そんなものを使えるんじゃないのかな、彼女は。」

「突拍子もない話…？そうでもないよ。最近ではそんな能力があると主張する輩も増えているというしね。」

「君だつて…、ああ、ごめんごめん。君のはそうじゃないんだね。」

分かっているよ。…そんなに怒らないでよ。少しからかっただけじゃないか。今度アレ、奢ったげるからさ。…ハハハ、単純だね。
「それで、それが百人いれば、その中の一人くらいは本物がいるんじゃないかな。…だからあくまで推測だって。いや、僕の勝手な妄想とも言える。」

「大数の法則、みたいなの？あれ？違うの？」

「えっと、まあ、『異端』としては有名だけど彼女、実力があるとしてもけっこう名を知られている、そうとうなものらしいから。安心しなよ。うん、安心して行っといで！」

…何を安心しろというのだ。…あいつは。

いつもそうだった。何か変わったことがあると俺に頼みこんでくるのだった。

それを、俺は最初は、ああだこうだと言っていたが、もうそういうことはやめることにした。

意味が無いから。

あいつ…、大口遼は…。

人格が破綻してしまっているのだから。

5

俺は屋敷までの道を一人、景色を見ながら、そんなことを思い出しながら歩いていった。

「超能力とか言ってたな…、んな、荒唐無稽な…」

と、俺がブツブツ言っている内に、目的地に着いてしまった。

「おや……。貴方は…、綾川様ですか？」

如何にも温厚な口調で俺を出迎えてくれたのは、（いや、相手は

俺を出迎えるために外に出ていただけワケではなく花に水をやって
いたようだ。執事服をこれでもかと言うばかりに完璧に着こなして
いる…。五十ばかりの男だった。この人は、何か偉大な人のような
そんな何かを感じさせ、少なくとも単なる見た目では亜衣沙さんよ
り、この人のほうが立派というか…。風格があるな、と思った。

「あ、ハイ…。貴方はあの…」

「おや、これは失礼。私はこの屋敷の執事を務めております、坂口
司と申します」

「えっと、俺は綾川です。……。どうもです」

司さんからの最初の挨拶からして、俺の名前はもう知っていたよ
うだが、自己紹介をして、深々と頭を下げてきたので俺も慌てて軽
くペコリ、と頭を下げた。

驚いた…。こんなに深々と頭を下げられるのは初めてだった。

「中にご案内します」

また、司さんのもとても優しい声が聞こえた。

だが、それを俺は拒まなければいけないのだった…。
何故なら。

今俺に家庭教師をする気が無いという意を司さんに伝えなければ、
もう伝える機会が無くなってしまいたいそう…。そんな気がしたから
だ。…。だからと言って、ストレートに言うのは少し抵抗があった。
だから俺は遠まわしに言うことにした。

俺は咄嗟に近くにあった、赤い花を見つけて、

「あの…。この花は何と言うんでしょうか？」

「ああ、これはですね、ガーベラでございます」

司さんは微笑みながら言った。

「ガーベラ…。っすか…」

…。ヤバい、ヤバい。やつちまったな。

花にことなんて何にも知らない俺が、花から話を展開できるワケ
がないのだ。

…。困ったぞ。

何とか…、話を

花といえば…そうだな、

「ガーベラの花言葉は何ていうんですか？」

「そうですね…この辺りにある赤のものは、『神秘』という花言葉がありますよ」

「神秘…」

思わず反復する。

この辺にある赤、ということは他の場所にもガーベラの別の色があるということだろうか、ってというか花言葉って色別に違うのか、知らなかった。

「そういえば…花言葉って実際…、何なんですか？」

司さんはいたって温厚でまじめそうな口ぶりで、

「そうですね…、花の色、香り、形、という花のすべてを感じて、象徴的な意味を持たせたもの…ですね。すみません、良く分からない説明で」

と、言った。

「いえいえ、十分ですよ…、ありがとうございます」

それぞれの花の持つ、意味か。

意味…、あ、そうだ。

俺は聞こうとしていたことをふと思い出す。

「あの…、俺はどうしてこの屋敷に呼ばれたんですか？」

俺としては、少し思い切った質問だった。

司さんは何かを思い出すように少し顔をしかめ、俯き、次に顔を上げ、神妙な顔で言った。

「それは…、それは、屋敷に行けば分かることでございます」と、言った。

「は？」

思わず声が出てしまった。

だって、そうだろう。…何故そんなことを言うんだ。そんな、はぐらかす様な言い方。だって、おかしいじゃないか、知らないのな

ら知らないと言えはいいのに、可笑しいことを言う。俺は今から、仕事を断りたいという意を伝えようとしていたのに。

これでは、今の俺にとっては。

『何としてでもまず、俺を屋敷の中に引き入れようとしている。』
と、そんな風に思ってしまう。

俺の言葉に司さんは気付いていないだけなのか、お構いなしに、どうぞ中へ、と言う。

これっぽっちの対人スキルも持っていない俺にとってそれはもう、断ることのできない誘い、言葉だった。

いわば、俺にとって命令。

誘導。

だが、それはさすがに考え過ぎだと思っていた矢先、考えすぎではないことというこが確実になる出来事がおこる。

确实と言つか、そこまで考えさせられるほどの、

それは、

司さんの目線の先に、

つまり、俺の、

俺の後ろに、竜宮亜衣沙がいた。

6

「…！」

「…おや、綾川さん。もう来ていたのですか」
後ろから亜衣沙さんの声がする。

これは…、これは何だ、この状況。

俺も運が悪いぜ、偶々こんなときに亜衣沙さんの散歩の時間に鉢合わせるなんて。

何て、そんなわけないだろ。

偶然なわけがない。

やはり、何か考えがあるのだろうか。

いや、そんなことより、俺を呼んだ理由。

それだけが、不可解だ。もし、亜衣沙さんが俺を逃がさないために、外へ出てきたのなら、そこまでする理由が、意味が分からない。

「……こんなところにいるのもアレですから、どうぞ中へ」
どうする。

一度入ったら、断るのは難しくなる。

でも、今、この状況でそれを言うのは、俺には、できない……。

いや……駄目だ。言わなきゃ。

こんな、非日常的なことは、起きちゃいけない。

そんなものは俺から切り捨てなければいけない。

俺は振り返り、亜衣沙さんに向かって至極真面目な風を装い、言った。

「あの……亜衣沙さん。悪いんですけど、俺、」

「……？」

「俺……」

もう、どうにでもなればいい！

俺は亜衣沙さんの目を見なくていいように、思いっきり頭を下げて、大声で言った。

「家庭教師……、やめさせてください……！」

「……」

亜衣沙さんは初め黙っていたが、俺がいつまでも頭を下げているので、

「そう……」

とだけ言った。

あれ？いいのか？こんなに、あっさりと……、

「帰ってもいいんですか……？」

そう言っつて、俺が頭を上げると亜衣沙さんは、笑っていた。

「なら…仕方ないわね…」

全然そんなことを思っておないような口調、帰すつもりなんて毛頭無いような表情。

その表情に俺は異質なものを感じ取り、愕然とし、足がすくみそうになる。

「……」

10秒ほど沈黙が続くとまるで、それを待っていたかのように、足音が聞こえた。司さんでも亜衣沙さんのものでも俺のものでもなく、4人目の足音。

「そんなところに集って、何をしているのかな」

亜衣沙さんは、声が聞こえるとニコリ、と笑って足音の方を見て言った。

「おやおや…貴方も、もう来ましたか」

俺も声のした方を見る。

「お久しぶりですね、竜宮亜衣沙さん」

俺はそいつを見た時、驚愕で眼を見張った。

彼は、顔は俺より多分5、6歳ぐらい年上で、身長も相当高く、メガネをかけて、スーツを着用していた。

そこまではいい。普通である。

彼の髪型が、銀で、オールバックにし、その男性にしては長すぎる髪の毛を後ろで縛っていなければ。

コスプレかよ、と、普通はそう思うだろう。

「コスプレじゃないんだよね。言っておくけど地毛だよ」

俺が思考していると、横から声が聞こえてきた。

地毛かよ。何食ったらそんななるんだよ。

…って、え？

今、俺コスプレって単語なんて、一度も口に出してないぞ？

何で分かったんだ？

「みんな最初はそう思うんだよね。って、自己紹介がまだだったね。僕は天棗っていうんだ。知ってるかな？」

僕は、あまなつめって言うんだ。

俺の顔を見て、無表情でそう言った。

僕はそれを見て彼女を思い出す。

彼女も同じように無表情だったが、こいつは、天棗のは全く別で俺の全てを、根こそぎ、内から観察されているような、不快な視線だった。

彼女の方がまだ、可愛げがある。

と、言うか、まただ。また心を読まれた。

「君の事なら鏡を見るように分かるよ。藤堂君…、いや、大口の附添人と言った方が通りはいいかな？」

大口、の附添人？何言ってるんだ？分からない。

「何なんですかあなた……」

俺は棗さんを睨みながら、嫌悪に満ちた声で言った。

分からない。こいつが分からない。

「敵対心全開だね。いいよ。それでいい。でも、言っておくけどね。生まれて初めて鏡を見た人間が、それは光の反射だと思う人間がいるかい？植物を初めてみて、誰が二酸化炭素を吸って、酸素を吐いていると予測できる？」

「……何が言いたいんです？」

「何も言わないよ？僕は何も言わないし、言うつもりもない」

自分で考えると、そういうわけなのか、ただの回りくどいアホなのか。

よく分からない。

謎、だった。

ただ、気持ち悪い。

ただ、俺なんかでは到底越えることはできない、一つ線の向こうにいる存在、それだけが分かった。

強いて言えば亜衣沙さんを初めてみたときに感じた感覚と似ている。

「そんなことより、藤堂君」

と、棗さんは馴れ馴れしく切り替えてきた。

棗は続ける。

「藤堂君、君はもしかして、帰ろうとしているんじゃないのかな」

「……」

その発言は別に驚かない。

さつきまでの俺と亜衣沙さんの話を聞いていればそれは、バカにでも可能な発言だから。

「姑息だね」

棗さんは嘆息してから、哀れむような目で、呆れるような声で言った。

もちろん、俺はこいつと会うのは初めてで、そんな奴に姑息だと言われる謂われは無い。だけど、

「…何が、どういう、意味で……」

俺以外の三人全ての視線が此方を向いている、そんな気がする。

呼吸が、乱される。

「そのままの意味だよ、いつでもその場しのぎで済ますつもりかい？」

逃げるのか？

と、棗さんは言う。

「逃げるって、俺はそんなつもりは」

俺は肩を竦めて、できるだけ早く答えた。

「ふうん」

棗さんは興味のなさそうな、どうでもいいような、そんな返事をしてから、

「……別にいいけどね、君がそんなつもりが無いってんならそうなのかもね。それに、それ以上を言うのは失礼ってものだ。でも、僭越ながら言わせてもらうけど、いや、そこは堂々と言わせてもらうけど、君、まだ気になることがあるんじゃないのかい？ねえ、君はそれでいいのか？ねえ、君はまだ、そんなことを続けるつもりかい？なら、君は終わったままだね、あのままで」

「そんなこと、」

俺は棗さんの言葉を遮るように言って、そこで初めてそいつの眼を見た。

眼を。

それは、眼鏡の奥から、そのまた眼の奥の奥、遙か遠くから監視されている様な眼。

それは、この世の全てを、悪も善も絶望も知って、それでも尚、世界を見下す様な眼。

その眼は、俺を見ていなかった。

俺は一瞬たじろいだが、

「そんなこと……、貴方には関係ないじゃないですか、貴方、それだけで、俺の事を知ったつもりですか？」

強く言い捨てる。

だけど、言葉とは裏腹に、俺はすっかり、すっかり狼狽してしまっていた。

さっき言われた言葉が、本当かどうかも自分で確かめもせず、自分で勝手に動揺していた。

いや、確かめる必要なんてない。

言葉の誤差など、露ほども感じさせない、反論するための思考など、微塵も与えない、正論だった。

「知らないよ。だって今日君とは初めて会ったんだから。初めましてで、それで相手の全てが分かるわけ無い。知るわけ無い。でも、僕が知るうとすれば、それは、グラスを手に取るよりも簡単なんだよ」

「意味が分かりませんね」

俺は即座に答えた。

しかし棗さんは、そんな俺よりも早く、こう答えた。

「そうだね、君には到底分からないんじゃないかな」

と、棗さんは続ける。

シニカルな笑いを浮かべて、言った。

「天才としての考えだからね」

7

「スゲー…！」

屋敷に入った俺の題一声がこれだ。

広くて、眩い。

普通に、俺の家よりかは広い玄関だった。

所々に、巨大な水槽が置かれていて、魚達が広々としたスペースの中で泳いでいた。いや、海と比べれば、そこは所せましと、言っただ方がいいのか。

とか何とか思っていると、

「ハハ、そんなツマラナイ感想しか言えないのか、君は」

隣で天さんが俺を横目で侮辱しながら笑っていたが無視した。

「此方でございます」

司さんが案内する方へ俺と亜衣沙さんと棗は歩いて行った。
すると、

「おや、アイちゃん、その人達は誰だい？」

後ろから、男性の声が聞こえた。

「あら、塔也さん、手櫛さんと手品をしていたのでは？」

と、亜衣沙さんが言う。

「アイちゃん、俺が今日此処に来てから何時間経ってると思ってんの。そういつまでも俺があんな地味なこととしてられるわけないじゃないか」

と、笑いながら言ったのは30歳くらいの、カッターシャツの上ブレザーを着て黒いデニムを履いている、背は俺より少し高いくらいか、比較的若い格好をした誠実かつ軽薄そうな男性だった。

いや、どつちだよ。

俺は自分で自分に突っ込みを入れながら思った。実際もつと若いのかもれない。俺には人を見る目が無いから、と言うのは関係ないかもしれないが、俺には年齢はよく分からなかった。

「で、彼らは？」

塔也さんがアイちゃん…、もとい亜衣沙さんに言った。

その呼び名からして、塔也さんは亜衣沙さんと同級生なのかもしれない。亜衣沙さんは塔也さんのことをニックネームで呼んでいたのでそれは無いのかもしれないけど、ただ『そう呼んでないだけ』で昔はお互いニックネームで呼び合っていたのかもしれない。或いは、今も。

「ええ、彼らは…」

と、亜衣沙さんは続ける。

「私の愛人と亜麻の家庭教師よ」

「そうかそうか、この人達がアイちゃんの愛人と亜麻ちゃんの、

って、嘘！？あつれえええええ！？」

なんて、面白い声を上げながら、飛び上がった。

「…嘘ですよ？」

俺は横目で棗さんに小声で言った。

「…ん？どうだかな、想像に任せるよ」

と、適当に返事をされてしまった。この人はどうやら自分に興味が無いと、圧倒的に会話をしてくれないようだった。俺は全然そんなことはかまやしないけど。

「アイちゃんてば、愛人ってそんな…、…罪っ！」

塔也さんはノリっぽく言ったが顔は汗まみれで顔もひきつっていった。ていうか声、裏返ってるし。

おもしろい奴だな。

亜衣沙さんはそんな塔也さんを宥めるように、笑いながら、言った。

「あらまあ、塔也さんつたら、冗談ですよ」

それを聞いた塔也さんの顔は一瞬で緩み、

「……だよねえ！アイちゃんがそんなことするわけないもんねえ！」

「そうですねよ、ふふふ……」

亜衣沙さんは無邪気な子供みたいに微笑む。

つか……、亜衣沙さんは俺と棗さんだったら、棗さんを選ぶのか……、いや、全然悔しいとかじゃないけど、なんとなく。いや、本当になんとかなくだけど。

亜衣沙さんは嫌いだし。棗さんは苦手だ。

ていうか、亜衣沙さんはそれくらいの軽口を叩けるぐらい普通の人間らしかった。大口の言葉からすると、そういうことを言いそうにないんだけど。先入観で全て決めているわけではないが、少し考えを改める必要があるかもしれない。

あれ……？ということは、塔也さんは一体亜衣沙さんの何なんだ？友達と見るのが自然だけれど、夫婦だとしたら今の会話、洒落になんねえぞ……。

俺はそんなことを思いながら、塔也さんの顔を見ていると、

「んで、君は……」

そう言いながら塔也さんは俺の方を見た。

急に此方の方を向かれたので、俺はビクツとなって、

「……ああっ、綾川、です……亜麻さんの家庭教師、っす」

「へえ……、君がそうなのか」

塔也さんはにこやかに笑いながら言った。

「君、いくつなの？」

塔也さんがいかにも興味津々といった様子で、俺を見る。

「えと……、もうすぐ18っす……」

塔也さんと話すと、何故か学校の先輩と話している気分になる。

見た目が若いからそうなのだろうが、俺が学校以外で年上の人と話すのが全くといっていいほど無いというのが理由なのだろう。いや、塔也さんには相手を上手に出させる何かがあるのかも……、

「へえ…じゃあ17か、咲弥と二つしか変わらないのかあ、やっぱり男子は成長はえーよなー！」

塔也さんが機嫌よさそうに言った。勢いで、塔也さんは俺の背中をバシバシと叩いた。何でそんなにテンションが高くなるのか分からない。

「…てて、痛いですよ…。ていうか、咲弥…？」

「ああ俺の妹だよ」

「妹…？」

「ああ、今日もここに来てっぞ」

15歳で、女の子…。

まさか、と俺は思う。

俺が屋敷の道の途中で遭った、あの無表情で、俺の手を舐めた、あの女の子。

塔也さんの妹なのかもしれない。

考えても仕方が無いので、俺はさりげなく、探りを入れてみることにした。

「へえ…塔也さんの妹ですか、会ってみたいですね、今、どこにいるんですか？」

塔也さんは、ニヤついた顔で、俺を挑発するような口調で言った。

「お？何？咲弥に興味あったりするわけ？」

でも、ちよつとウザかったりするなあ、この人。

「……まあ」

俺は適当に言っておいた。

「そうかそうか…ふうん、そうだなあ…」

塔也さんは少し考え込むような動作をしてから言った。

「あいつ勝手だかな…、何処行っつかわかんねえや…」

「…そうですか」

やはり、塔也さんの妹があは無表情の少女だという可能性はあるってことか…、いや、だからといってどうということもないんだけど…。

塔也さんが続けて言う。

「ちよつとさ、綾川が探しに行つてくんねえかな？お礼はすつからさ」

と、塔也さんは手のひらを頭の前で重ねて、形は頼む時のそれだったが、何かを含んだような笑みをしながら俺に言った。

「だめかな？」

俺はちらつ、と亜衣沙さんを見て、助けを求めたが、

「……？構わないわよ？」

とでも言つてしまいそうな顔でニコニコ笑っていたので、流石にこれ以上見ることは無かった。

「……だめか？」

塔也さんが友達に頼むように言う。

やはり、憎めない。

「いや、構わないですけど……」

思わず、言つてしまった。

「おー、本当か！サンキューな！本当にありがとう！」

「い、いや……、全然大丈夫ですよ」

俺は、笑いながら言った。引き受けたからには、やるしかないのか。

「亜衣沙さん、構わないですか？」

俺は最後に亜衣沙さんに聞いた。

「ええ、構わないわよ」

……仕方ない。行くか。

俺は塔也さんと、また、少しだけ話しをしてから塔也さんの妹、咲弥ちゃんを探しに行った。

誰がそれを俺に問うたのかは思い出せない。
思い出せない。

テレビで、ニュースが流れる。何気ない、今ではもう当たり前のように流れる、殺人犯が逮捕されるニュース。

暗い部屋の中、テレビの光に照らされながら、笑いながら言う。

まぬけだなあ。

私ならもっとうまくやるのに。

思い出した。あの人は女性だった。

……、はどう思う？コレ見て。

彼女はテレビを指さして、無邪気な笑顔で俺に言うんだ。彼女は可愛らしく首を傾げていた。少し力を加えれば、それだけで、ポキリ、と折れてしまいそうなそんな首、手、足。

俺はどうしたんだっけ。

そうだ、俺は、答えなかった。答える必要なんて無いから。彼女と俺との間に言葉は必要無かったから。言葉なんて意味を成さない。

分かるよ。でも、言うてよ。

彼女は俺の頬に手を当て身を乗り出し、俺に顔を近づけて、言った。どうせ彼女は、俺の言いたいことは、俺が考える前に、もう分かっているくせに、どうやら俺が発した言葉を聴きたいらしい。俺の声帯から発せられる、俺だけの声。

俺は、ご期待に答えてやろうとして、何を言うてやろうかとそれから考えを吟味した。

だけど、何故か、俺は、言うことができなかった。そんな俺を、それを彼女は満足そうな笑みで見つめていた。

俺がとどのつまりになっていることを分かっているのだ。

俺がそうなる前に、

分かっている、あえて何も言わない。俺が思うことは、彼女も思ったし、彼女が感じることは、俺も同じことを感じる。だからさっきの問いは所謂お遊びみたいなものだった。俺たちに会話はいらぬ、

質問し合うなんてもつての外だ。

そのハズだった。

なのにその日、彼女は俺に問うた。

ねえ…、くんって、私のこと、どう思ってる？

……は？やめろよ。俺達に言葉はいらないだろ。

やめろよ。

そんな、

痛い。

痛い。

痛い。

イタイイタイイタイ。

イタイイタイ、イタ。

イタ。

9

「あ、いた」

「!?!?」

彼女はびくつと体を震わせて、ゆっくり此方を向いて、

「ご、ごめんなさいっ！勝手に、歩き回っ……、」

彼女は言いかけたが俺の顔を見て、自分の兄じゃないことに気付いたのか、おどおどしながら、言った。

「あ、あれ…。兄さんじゃない、……誰？」

俺は思わずたじろぐ。

「兄さんじゃない、」までの声は、内気な少女のそれだっのに、

その後は返答次第では大声で叫ばれ兼ねない、不審者でも見るような、そんな敵対心のこもっている眼で、「誰？」の言い方が背筋が

凍りそうになるほどの、言葉自体が鋭利なナイフのような、そんな鋭さを感じる声だった。

「ご、ごめん……、驚かせちゃったかな……？俺は、あの、そういうつもりじゃなくて……」

俺は、言いかけたが、続きは言うことができなかった。

彼女が……、

咲弥ちゃんが近付いてきたから。

鬼の様な形相で。

最初見たときの様な内気な少女は、もう此処にはいなかった。

「……………っ！」

状況を説明しておこう。

とは言っても俺だって今、この状況を把握し切れているわけでは無い。

でも、俺にはその一部始終を説明する義務があるだろう。

あくまで狼狽した状態の、俺の、主観である。

俺が、咲弥ちゃんを探して屋敷をさ迷うこと30分ほど、乏しいものも、というか、何か今後のためにも序で、何か探しておこうかと思ったが、ほとんど何も見つけられなかった。収穫といえば、人と言っているのか分からないが人らしきものには会った。未九苦真三さん……、読み方は いまくく しんぞう でいいらしい。俺は彼と、少し警戒しながらも自分の名前を名乗り合った。

化物

化物……は失礼かもしれないが、それぐらい奇抜で化物じみていた。少なくとも、第一印象が「あー、化物かと思った」だったし。

まず、表情が見えなかった。ていうか、顔が見えなかった。

腰までありそうな長い髪に隠れていたからだ。

最悪、どんなに長い髪でも前髪の方は比較的短くするものだろうと思っていたが、そんなことは無かった。

不可解なことに、前から後ろまで同じ腰までの長さで、綺麗に切り

そろえられていた。

異常なまでに綺麗に。

髪の毛の質は一年間洗っていないかと思うほどにちりちりになって傷ついているのに、長さは1ミリの誤差も無い均一だった。俺はそれにどこか、矛盾さを感じた。

これでは、真三さんがこつちを向いているのか、そうでないのか、全く分からなかった。

いや、違う。彼から見れば、前も後ろも同じなんだろうと思う。

何故なら、俺がそれで眼は視えるのかと訊いたら、彼がこつち言ったからだ、

「見えない。前も後ろも上も下もさんびやくろくじゅつど、とつぎいなんぼく、しほうはつぱう見えない。でも、分かる。周りの音で今どんな状況なのかは分かるから。それでも分からないときは、……こつち、指を鳴らしてね、反響する音で、障害物との距離を測るんだ」

彼は俺に指を鳴らしてみせた。

それは、口で言うほど簡単な作業なのだろうか、俺は思った。

眼が見えないというのは、どんな気持ちなんだろう。

そして彼は一発で俺の手の位置を当てて見せ、掴んだ。いや、握つて、その年齢が全く想像できず辛うじて男だと推定できる声で、言った。

「やあ、よろしくね、……綾川くん」

……ええ、宜しくお願ひします。

俺はそう言ったのだった。

そして、咲弥ちゃんの居場所は真三さんが教えてくれた。

多分、厨房に入っ行って行ったよ。

「そして今に至る」

口に出して言ってみたが、自分の置かれている状況をより明確に自覚できてしまっただけで、改善されたわけではない。

「……？」

咲弥ちゃんが此方を怪訝そうな顔で見る。

その手には、厨房の包丁が握られている。

その包丁がどんな種類なのかは分からない。

ただ、人間の腕を斬るにはもってこいの形状だとは思う。

そんな傍観者めいたことを言っている場合ではないのだが、そりや現実逃避もしたくなるだろう。

だが、彼女は俺のそんな現実逃避から現実に引きずり降ろすように、笑ってビュッ、と近づきながら包丁を振ってみせた。

それは、この手の話ではよくある無邪気な笑顔ではなく、何も秘めていない、剥き出しの殺気を漂わせる笑みだった。

「……っ」

戦慄が走る。

冷や汗が絶えず、絶えず流れる。

「大丈夫、少し眠っててもらっただけだから」

ゆっくり、ゆっくり、俺に恐怖を与える様にして近づいてくる。

そして俺が上着のポケットに手を入れようと手を動かした瞬間

、

ドンッ！と彼女は俺を押し倒し、俺は床にたたき付けられた。

「がっ……！」

肺から空気が絞り出される。

すぐに抵抗しようとしたが、それよりも早く、彼女の包丁が俺の首に触れる。

馬乗りのような形で彼女は俺の上に乗し、腕を足で固定して、包丁の持っていない方の手を俺の顎に添え、ぐいっと親指と人差し指で持ち上げられた。

「ひっ……」

途端、俺の首がから空きになり、彼女の顔が見えなくなる。

厨房の出口だけが、はつきりと見えた。

つか……、斬られるのは、腕じゃなくて、首だった。

普通ならば、中学生の女子の体重如きでは高校生の俺を抑えることはできない、もし抑えたとしても高校生の腕力ですぐに突き飛ばされるだろう、だが、包丁が首元にあるという状況がそれを圧倒的に躊躇させる。

彼女は俺の耳元で囁くように言った。

「私の命令以外の行動をしたら、この手を引く」

そう言っつて、彼女は包丁を持った手に少し力を入れる。

チクリ。

「……！ふっ……ふ、ふっ、ひっ」

恐怖で、思わず息が漏れる。

「無粋な声を出さないで頂戴」

耳元でブリザードのような冷たい声が聞こえた。あまりに冷たさに俺は慄然とする。

こいつが、中学生？

ふざけんな。

荒唐無稽もいいところだ。

今の中学生は隠密に人を殺す授業でも習ってるのか。

小学校で人を拷問する卒業試験でも受けてきたのか。

いや、そんな冗談を言っている場合じゃない。

このまま、咲弥ちゃんに拘束されたままでは、何をされるかわからない。咲弥ちゃんの言っていた、少しの眠りが永遠の眠りにならないとも限らない。

こいつは、危険すぎる。

いや、待て俺、現実逃避なんてしてんじゃねえ。

硬直状態になってどれくらいか経ち、息を呑む、俺は意を決し、

そして、口を開く。

「君の、お兄さんに、言われて……」

彼女が少し反応するのが分かった。

俺はその様子を窺いながら、息を呑み、続けた。

「お兄さんに言われて、ここに来たんだ……。咲弥ちゃん、落ちつ

いて。話をしようよ」

俺の振り絞った言葉を、僅かな希望を、遮るようにして咲弥ちゃんと言った。

「……自分の立場、分かってるよね……、勝手に喋るな」
ドスン。

脳に衝撃があつたと理解する前に、目の前が真っ暗になる。

「あ……、がつ……！」
首を殴られた。

と、把握するのにどれくらいかかったか、俺はただ痛みに悶えるだけだった。

鈍い痛みが首に染み込むように続く。

脳が揺さぶられ、意識が飛びそうになるが、辛うじて耐えて、耐えて、耐えた。

この状況で意識だけは飛ばしてはいけない、絶対に。

俺の人間生物としての本能が、そう言っている、そして、彼女の吐息が耳元にかかる。

「次、勝手に話したら」

殺す、とでも言うのか。

簡単に言うのか、そんなことを。

笑える。

「……何が、おかしい？」

俺の雰囲気から何かを読み取ったのか、声を低くして、咲弥ちゃん鋭く言った。

「………可笑しくなんか無い。俺は別に、咲弥ちゃんに危害を加えるつもりはないし、意味もない。ただ、疑問なだけ……。どうして、こんなことするの？」

グツ、と首を掴まれる感触があつた。

スツ、と彼女が包丁を振り上げる。

この隙に俺は拘束から抜け出せたかもしれない。

だけど、俺はそれをしなかった。

彼女は言う。

「惚けるな」

「惚ける？何を？君が何を言ってるのか、俺にはさっぱり分からない。君が、何でこんな馬鹿げたことをしているのかも。でも、君は、俺を、傷つけることで、何かを必死で守ろうとしてるんだよね？それは分かる」

俺が急にペラペラ話したので彼女は驚いたように眼を見開いた。

「……でも、考えてみてよ、咲弥ちゃん。もし、俺が死んだとしても世界は何も変わらない。俺が死んだことにも気付かずに、回る。俺なんて、世界が回るために必要な歯車じゃなく、それにこびりついた埃だ。俺が生きていても歯車が回るのに何の影響もないし、死んだとしても問題無く回る。何の意味もない。俺は、そうだな、世界を構成していない側の人間なんだよ」

俺は淡々と続ける。

「ま、両親と数少ない友人が悲しむくらいかな……。俺にとって、それはとっても悲しむべきことなだけだね。まあ、それは置いとくよ。君は、どうか。多分、君は世界を構成する側の人間だと思うな、俺は。そんなことは一概には言いきれないんだけど。でも、考えてもみてよ。そんなことをしてもお兄さんが悲しむだけ。家族が君に失望するだけ。はっきり言おう。君が今から犯そうとしているのは、何の利益もない罪だ」

もちろん、そもそも利益のある罪があるなんて俺は思っちゃいない。罪を犯した罪人に待っているのは、罰だ。償いだ。

「うるさい……」

彼女の包丁の持つ手に、ぎりつと力が込められる。もちろん、俺の首を絞めている方もすっかり握られているので、多少苦しかったが、我慢して続けた。

「……最後に一つだけ、聞いておこう」

「君は俺を殺すのか？」

「うあああああああああ！！」

彼女が叫ぶと同時、

彼女の腕が、振り下ろされる。

俺は眼を閉じる。

嗚呼、この子には、何を言っても無駄なのか、言葉は届かないのか。

俺は、彼女に此処で

……仕方無い。

ただ、それが、偶々今日で、場所が偶然此処だったっていうだけで、

こんな可愛い娘に殺されるなら、別に

……つか、何で、何で俺はこんなにも安らかなんだろう。

俺は、眼を開ける。

それでも、まだ死ねないんだよなあ。

俺は、口を開く。

「録画、完了。DEAD END、だよ」

俺が言った瞬間、彼女の後ろからピロリ〜ンと間の抜けた電子音が聞こえた。

彼女が振り下ろす手を止め、咄嗟に後ろを振り返る。

「お前……っ！」

彼女が明らかに動揺し、ほんの少しの隙ができた瞬間、俺は思い切り彼女の足から片腕を脱出させ、力の限り、手加減なしの全力で、彼女を突き飛ばした。

「ぐう……！」

強く突き飛ばし過ぎたのか（俺が言えたことじゃない）、彼女は二メートルぐらい先まで転がった。

拍子に彼女の持っていた包丁は彼女の手を離れ、床を滑っていった。

「は、ぐうっぐうっ……」

彼女は転がった先で悶える。

それは、突かれた芋虫のようだった。

俺は速やかに携帯を回収し、咲弥ちゃんに言った。

「手詰まり、だね。咲弥ちゃん」

彼女が痛みで声を漏らしそうになるのを堪えながら、体を起こす。俺は咲弥ちゃんを見下ろして、言う。

「最初からこうなることは決まってたんだ、咲弥ちゃん。君が早急に俺を始末しなかった限りね。気付かなかったかい？俺が君に押し倒される直前、携帯電話を操作してたこと」

俺は得意げに言った。……さぞかし腹の立つ光景だろう。

彼女は俺を、きつと睨みつけた。

おそらく彼女は、あるとき俺は携帯で、誰かに助けでも呼ぼうとしていたとも思っていたのだろう。

「そんなこと……」

彼女は未だに息が整わない状態から、声を絞り出すように言う。

「できるよ。携帯を開いてから選択キーを一回、十字キーを上に戻、また選択キーを一回、そして十字キーを下に一回、そして選択キーを二回押す。これで俺の携帯は録画動作ができる」

「ふ……、でもどうやって、あの電子音はどうやって出したのですか」

「俺の携帯は自動に三分で完了になるんだよ」

なんなら調べれば、と俺は彼女に携帯を差し出した。

「……！」

すると、彼女は怯えるように、俺から距離を取ろうとする。

「ふっ」

ま、これは半分本当で半分嘘なんだけど。

咄嗟にそんな操作、できるわけないだろ。

俺は嘆息し、携帯をポケットにしまい、続けた。

「質問に答えたよ、順番だ、俺の質問に答えてくれるかな？」

「……そんなの」

強引だ、とでも言いたいのだろう。

外道、と、言いたいのかもれない。

しかし、俺には、さっきまで殺されかけていた相手に対する優しさは、生憎、持ち合わせてはいなかった。

「無言か……、それは肯定と受け取るう」

俺は咲弥ちゃんをほとんど無視して続けた。

「咲弥ちゃん……、どうしてこんなことしたんだい、俺は君に何かした覚えはないし、謂われもないはずだけど」

「……」

沈黙が続いたが、何も言わなければ状況は何も変わらないことに気づき、咲弥ちゃんはやがて、口を開いた。

「……ました」

「え？」

あまりにも小さすぎる声に、思わず訊き返す。

「貴方は、私を見ました」

咲弥ちゃんが俯きながら重い口を開く。

「ふうん。咲弥ちゃんは、見られただけで人を殺すんだ」

俺は嘘を暴くみたいに言った。

「違う、殺すつもりなんて……、本当にただ気絶させようとしただけだった」

彼女は俯きながら、俺に訴えかけるように言った。嘘に決まっている。最初は本当にその気は無かったのかもしれないが、途中から彼女の眼は人を殺すそれだったから。でも、懇願するような彼女のその眼は、涙で少し潤んでいた。

その様子は、触るとすぐ壊れてしまいそうな、彼女に似ていた。

「…… 本当です」

俺は手で髪を掻き上げ、項垂れ、眉間にしわを寄せた。

「ほんつとに……、全然違うんだけどな……」

俺は一度、大きなため息をして言った。

「……？」

咲弥ちゃんが怪訝そうな顔をするが、俺は構わず、続けた。

「……まあ、いいよ。別に、俺にしたことは許すよ、許してあげる。……俺も悪かったよ、手加減つてものを知らなさすぎた」

俺はバツが悪そうに言った。

それで、彼女は少し敵対心を緩めたようにして、言った。

「……ありがとう」

それでも、聞こえるか聞こえないか、というほどの小さい声だったけど。

「まあ、でも、そんなことより、どうしてこんなことをする必要があつたんだい？」

殺人鬼めいたことを、とは言えなかった。

彼女が今にも泣き出しそうな顔をしていたから。これ以上咲弥ちゃんを苛めたら、咲弥ちゃんの学校の人たちにされそうだ。

「見て、ないんですか？」

彼女は、明らかに何かに躊躇しながら、最初に自分がいた場所を指さした。

「見てないのかって言われても、俺は咲弥ちゃんが此処で何してたかなんて、」

知らないんだから、と、言おうとして俺は彼女の指さした方向を見た。

思わず息を呑む、

「お、おいこれ……」

「ち、違う……、私じゃ……」

そこにあつたのは、
腕、だった。

雑な刃渡りの刃物で斬られたような、人間の腕だった。

？

10「俺はあの腕に引きずり戻された」

「 亜衣沙さん！棗さん！！」

俺は咲弥ちゃんの手を離さないようにしっかりと握りしめながら、ダイニングルームを探し当て、走ってきた。

「 あら？ 」

「 塔也さんの妹は見つかったのか？ 」

「 あ？ 」

順に亜衣沙さん、棗さん、そして見たことの無い、煙草を吸っている男が言った。

他に、もう一人、使用人らしき人がいた。

塔也さんと司さんはこの場にいなかった。

でも、そんなことはどうでもいい。

早く、

一刻も早く、

アレを伝えなければ。

「 何か、あったのか？ 」

棗さんがいち早く俺の変化に気づいて、俺に言った。

「 あ、あの……、 」

云おうとしたが、言葉に詰まる。

しかし、何と言えればいい？

厨房に、切断された腕があったと、そう言えいいのか？

腕を調理して食べようとしていた人がこの屋敷にいます、そう言

うのか？

違う、ふざけるな。

何て言えば、

何て伝えれば、

すると、俺の後ろから小さい影が前へ出て、言った。

「 すいません、皆さん聴いてください、……皆さん厨房に来てくだ
さいませんか、理由は後で話します 」

咲弥ちゃんが、みんなに言った。

「それは……、全員じゃないとダメなのかよ？」

知らない男が煙草を噴かしながら言った。

「……はい」

今度は俺が言う。

「何か、あったようだね。司さんと塔也さんは連れてきた方がいいかな？」

棗さんが、言った。

それで俺はやっと少し落ち着いて、言った。

「あ……、司さんと、塔也さんはどこに……？」

亜衣沙さんが答えた。

「司はまた、外へ水をやり、塔也さんは客室に戻っているはずよ、……連れてきた方がいいかしら？」

「いえ……、いいです」

「分かったわ……、行きましょう。望、皆さんを厨房へ案内しなさい」

使用人らしき人に言った。

「ハイ。畏まりました」

事務的な、冷たい声。

そうか、この人が門のときの……、
思ったより全然若くて驚いた。

そんなことより、

「急ぎましょう」

俺が言うと、そのまま俺達は、俺と咲弥ちゃんはもう既に知っている厨房への道を、望さん先頭で歩いて行ったのだった。

「……あの、貴方は？」

俺は厨房へ向かう途中の廊下で煙草を吸う、男の人に声をかけた。

「あー、俺ア、塔也と亜衣沙のダチだよ、正宗っーんだ、おめーは

？」

と、正宗さんは煙草を噴かしながら言った。

「綾川です……。……歩き煙草、良くないですよ」

「あ？うつせえなあ、こんなとこじゃ歩き煙草もクソもねえだろ」

正宗さんがうつとうしそうに言った。

煙草をやめて欲しい、の言い回しだったんだけどな……。俺の周りには煙草を吸う人間は一人もいないので、煙草の煙に過剰に反応してしまったのは確かだが。

俺は申し訳なさそうに言った。

「すみません、片や高校生如きにこんなこと……」

「おいおい、そんな縮こまんよ」

「いえ、いいんです……。俺なんか来ちゃいけなかったんですよ、こんな所……。場違い、だったんですよ……。俺なんて……」

「悪かった！煙草止める。俺が悪かったから、もうやめろって！」
怒鳴られた。

いや、冗談を言った俺が悪いのだが、……。まあ、本当は冗談なんかじゃないんだけどね……。八割ぐらい。

本当に、帰りたい。

冗談を言っても、全然気分は最悪なままで。

正宗さんは、指で煙草の火を潰して消した。

「うわ……。それ、熱くないんですか？」

「あ？熱くねえよ。慣れだよ、こんなもん」

そう得意げに言っただけで、正宗さんは、小さいゴミ箱のようなものに消した煙草を突っ込んだ。流石に屋敷内ではポイ捨てはしないか。つか、結局その作業をするのなら、指で直接火を消すなんてまねしなくてもいい気がする。だからと言って、ポイ捨てしてもいいというワケではなく、要するに、煙草は吸わないでほしいということである。

「なんで、わざわざそんな風に消すんですか？」

「別に、わざわざさつつつか、こっちの方がはえーだろ？煙草吸った

ら、おめーもやってみたらどうだ？」

「いやですよ。煙草吸いませんし。吸うつもりもありません。……

正宗さんはいつから煙草吸ってたんですか？」

正宗さんは少し考えるようにして、言った。

「あー、8年と7カ月21日35分と31秒だ」

「……え？」

俺は怪訝な顔をした。

だが、正宗さんが俺の質問に対して面倒くさくて、適当に返事しているのかと思うことにした。まあ、仕方ないか。こんな、自分の半分しか生きていないがきと煙草の話なんてしたくないだろうしね。

「いや……、なんでもねえよ。兎に角、8年もありゃ慣れる」

「はあ、慣れるもんですか」

「慣れるもんだ」

最後はもう、適当に返事をした正宗さんだった。

でも、この屋敷で今まで会った人たちの中で正宗さんが比較的一番まともじゃないかと思った。根拠は無いけれど、なんとなくそう思った。それだけでいいと思った。

1
1

「……綾川くん」

棗さんが俺を見て言った。

「……」

咲弥ちゃんがそれを信じられないものでも見るような顔をしているのが分かった。俺も実際、信じられなかった。

「どういうこと……？」

亜衣沙さんが俺に聞く。

俺はそれに答えることは無かった。

何故なら、予想外の事態が起きたから。

腕が、

「無い……？」

そこにあるはずの腕が無かった。

代わりに、朱で、シンクに文字が、乱暴に書かれていた。

Find a reason!

「……なんだよ、これ……」

思わず呟く。

「理由を、見つける……」

棗さんが呟く。

「おい……。てめえ、こんな落書き見せるために俺達を此処に連れてきたのかよ」

正宗さんが俺に向かって罵声を浴びせる。

「ち、違うんです！此処に、切断された腕があつたはずで……！」

俺は声を荒げ、全体に言いながら、咲弥ちゃんに助けを求めるように眼を合わせる。咲弥ちゃんは少し戸惑いながらも小さく頷いた。

「綾川くん、少し落ちついてくれないかな？君がそんな状態では、話が進まない、しっかりしてくれ」

棗さんが、呆れて言う。俺は思わず掴みかかりそうになつたが、流石にそれははばかった。

「すいません、熱くなりすぎました」

「熱い人間は嫌いだよ。面倒くさい」

こいつは、本当に。

あああ。

すると、くいっと、服を引っ張られる感覚があつた。後ろを見てみると、咲弥ちゃんが俺の服の裾を引っ張り、俯いて小さく首を振っていた。

「だめ……」

「……」

咲弥ちゃんが俺を制してくれなければ、もうとっくに俺は棗さん

の胸倉を掴んでいたことだろう。とはいえ、先ほど俺を殺しかけた時とは雲泥の差なのが、少し、というか大分気にかかったが、今はそんなことを言っている場合じゃなかった。

俺は小さく息を吐き、全体に言った。

「えっと、確かに……、此処に腕があつたんです」

と、俺はプラスチックの白いまな板を指さした。

それは、まだ使っていない新品のような白だった。血の跡なんて何処にも無い。ましてや汚れもない。

「ふうん……」

と、棗さんは俺が言つと、一瞬だけまな板を見たが、あとは一人で考え込むようにしてしまった。

「あの、棗さん、まな板を調べなくてもいいんですか？」

「……ああ、そうか。うん、心配しなくても……、後で調、べるよ……。うん……」

途切れ途切れにそう言つて、そのまま自分の世界に入り込むようにして考え込んでしまった。

「そうすか……」

俺は一応返答をしたが、おそらく、彼に耳には届いていないことだろう。

その所為か何なのか、少し沈黙が続く。

「おい、鮎川よ」

正宗さんが、いつの間にか俺の横に立って言った。

「一つ、訊きたいんだが、いいか？」

「……どうぞ」

俺は頷く。

「ん、じゃあ訊くけどよ……。お前が言っていた腕つてのは……、人間のだったのかよ？」

正宗さんが、俺に問いかける。

俺は怪訝な顔をして、言った。

「は？そくに、決まってるじゃないですか」

俺はさっきの正宗さんからの罵声の仕返し、では無いが俺は少し強い口調で言った。まあ、この場で、この状況で、冗談を言う正宗さんに腹が立ったからというのが真実だ。

「……それは本当に人間の腕だったのかって訊いてんだ」
まだ気づいていないのか、と言わんばかりに正宗さんは顔をしかめた。

少しその言葉の意味を考えて、やっと気付く。

「まさか、作り物……？」

咲弥ちゃんが何か新しい事実を知ったかのように、はっとした顔になる。その様子から察するに、咲弥ちゃんもその可能性には行き着いていなかったということか。

……盲点だった。そうか、その可能性だってあるんだ。ただのイタズラだってことも、可能性が無いわけではない。偶々、劇かなんかで使う腕を厨房に置き忘れてしまったという可能性もあるのだ。

まあ、これは例としてはいささか強引すぎる気もするが。

「いや、別にそうだと言ってるわけじゃねえよ。あくまで可能性の話だ」

俺はどれだけ明るい顔になっていただろう。正宗さんは俺を突き落とすようなことを言った。そんなことは分かっていたはずなのに、その言葉だけで俺の心は沈んだ。

「そう、ですよね……」

俺は力なく答える。

それが本当に作り物の腕だったらどんなにいいだろうか。いや、実際そうなのかもしれないが、もしそうだったとしても、あんなものを平気で厨房の台所に置いておく人間がいるということは至極不愉快だった。信じられない。イカしてる。

「一体、誰が……」

ふと、亜衣沙さんが今までの沈黙を破り、言った。まあ、ここに来てから何も話してない人もいるけど。望さんとか、望さんとか。

「ええ、いつたい誰がこんなこと……」

俺は亜衣沙さんに同調して、言った。

「いいえ違うわ」

亜衣沙さんは頑固違う、と違うのよ、と首を振った。

「……何が違うんです？」

俺は首をかしげる。

「もし、貴方達が見た腕が本物なら、」

汗がぶわっと噴きだすのが分かった。

それは、俺が必死に逃げていた、問題。

亜衣沙さんは、まな板の方を儂げに見て、そして、

呟くようにして、それを言った。

「 殺されたのは、誰？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2461y/>

見て――

2011年11月5日16時16分発行